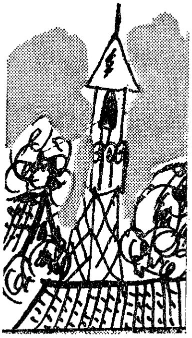
偉大な科学者の提言

堀内康人



大人たちが、「暑い暑い、はやく涼しくなってくれれば」などと愚痴をこぼしていますが、幼児たちはどうでしょう。大人が愚痴をこぼしている間に、汗をふこうともしないで動きまわり、なにかをしています。幼児たちは遊びながら、これから生きて行くために必要なあらゆる学習を喜んでしているというわけです。その幼児が幼稚園や保育所の生活を終えて学校へあがると、だんだん勉強がきらいになり、しまいには「また勉強か、いやになっちゃうよ」というようになります。私どもの子どものころを思い出してみても、苦労していやいやながら学習したことがなんとたくさんあったことでしょう。そのつづきで、幼児教育にたずさわる人たちも、いまだに幼児教育について考え、学ぶことにわきたつような喜びを感じている人が少ないというわけです。その証拠に、圧倒的多数の人々がわずか三、四年の経験で幼児教育の現場から消えて行きます。こうした状況ですから、幼児教育の積み重ねができないで、どこへいっても機械主義的な教育が繰返されている現状が目につきます。大学では学生時代に心理測定などの技術を教えられても、モンテッソーリがいっているように、それが役に立つかどうかははなはだ疑わしいもので、機械装置のような教師ができ上がってしまっている、といっておりますが、私もそんな気がします。幼児教育の科学化が巷に叫ばれているのですが、幼児教育の現場はどうでしょう。幼児教育の科学化のためには、幼児教育者が科学者にならねばなりません。モンテッソーリはこんなこともいっています。

「ところで わたしらは 次のような人を科学者というのです。そ

の人は人生の深い真実をきわめる方法を見いだし、その真実の魅力ある秘密をおおうベールを持ち上げ、そのさい自然に対して自分を忘れるほど情熱的な愛を自分の奥底に感じる人です。科学者は実験機械を取り扱える人ではなく自然を知っている人です。この崇高な愛好者は僧侶のようにその情熱が外に現われます。また外界からは何も聞かないで、その実験室（幼稚園・保育所としてもよいでしょう）で暮し、また研究にふけるので自分のことは忘れ、時々変わった行動をしたり、自分の服装はかまわないような人です。……それゆえ科学者の精神は、科学者の機械主義より上に存在します。科学者は、精神が機械主義に打ち勝ったとき、彼の登り道の頂点に達します。科学者は自然を研究して新しい知識を得るだけでなく、それを哲学的に総合することもしなければなりません」といっています。

人間社会における、子どもという自然であると同時に文化的存在を研究する幼児教育者、保育者の姿のあるべき方向を見事にいい表わしているような気がします。

私ども保育者が科学者だ、まあなんという現状認識の浅いことをいうんでしょう。今の世の中でこんなことが通用すると思っているのでしょうか、現場の保育者はたくさんの子どもたちをどのを考えるなどという余裕など爪の垢ほどもありゃしない、ある学者がそんなことをいったと学者先生がおっしゃる、それだから唐人の寝言だというのだ、という気持ちもよくわかるのですが、それをあえていっているのです。

そこで私は、そんなふうにお考えの方にわかっていただくために、次のようなことを申したいと思います。保育者の中にも学者の中にも間違った偏見が色濃く残存しているということです。それはなにかといいますと、肉体労働と精神労働とに対する偏見であります。依然として私たちの中には肉体労働は精神労働よりいやしいものだという偏見です。研究室や実験室で大学の先生がやっていることは高度な精神労働で、教育の現場での仕事はどちらかといえば肉体労働だという考えです。私はこうした考え方が少しでもあることに反対します。

それに関係したことで次のようなお話をしてみたいと思います。

一九三五年、レニングラードとモスクワで第十五回国際生理学会が開かれ、その時の大会の組織委員長をしたのが有名な生理学者イ・ペ・パブロフでした。彼がその翌年、全ドイツ炭坑職長会議へ、メッセージを送りましたが、それは実に格調の高いもので

かったので、メッセージを送ったのでした、そのメッセージは次のようなものでした。「尊敬する炭坑夫のみなさん。わたくしは一生を通じて知的労働と肉体労働とを、ともに愛してきましたし、またいまも愛しております。そしてどちらかといえば後者の方を余計にこのんでさえおりましょう。肉体労働の中になにかよい思いつきをもちこんだとき、いいかえれば頭と手とを結合させたときには、とくに満足を感じたものです。みなさんがたはこの道に入られました。将来もみなさん方が、この人類の幸福を保証する唯一の道を進まれるよう心から望む次第です」と。

教育学者や心理学者が実験室や研究室からどんなことをおっしゃろうと、子どもを保育する現場の教師や保母が具体的に体を動かし、子どもの遊びのなかにとびこんで、子どもたちと一緒に生活しなければ教育的事実はないのです。パブロフは同じころ若い科学者にこう呼びかけています。

「鳥の翼がどんなに完全であるとしても、空気なしでは鳥を飛びあがらせることはできません。事実――それは科学にとって空気であります。それなしでは諸君は決して飛びあがることはできません。それなしでは諸君の理論は、むなしい羽ばたきにおわってしまいます。しかし研究し実験し、観察しているときには、いつも事実の表面にとどまらないよう努力することです。事実の記録係になりおわってはいけません。それらをひきおこす秘密の中につらぬきいるようになさい。それらを支配している法則をねばり強く探求しなさい」と。

さきのモンテッソーリの言葉とともに実にすばらしい、偉大な科学者でなければいえない言葉だと思います。

日本ではまだ現場の教師が教育を科学できるような環境になっていませんし、そんな日がいつやって来るか心もとないかぎりですが、できるところからやっていく以外に道がありません。保育のカリキュラムを機械的にたてて、無事一日の保育を終え、型通り保育日誌を書き、いろいろな行事をその中におりこんで、月日は矢の如く流れ去ります。アメリカのフィラデルフィアで脳損傷・精薄・精神遅滞・脳性麻痺・痙直性・肢麻痺・半身不随など、脳障害に悩む子どもたちの治療教育にあたって大きな成果をあげている、グレン・ドーマンは、

「私たちの研究所では、この子はよくなったと思う、という表現はすでに禁句だった。もし誰かがうっかりこれをいってしまうと、きまってこういう答が返ってきた。よくなったと思うなんていうんじゃない。君がどう思おうと思うまいと問題じゃない、あの子が以前にできなかったことで、今できるようになったことがいったいあるのかないのか」

それが大切なのだといっています。ちょっとしたことのようですが、毎日の保育を反省する上で耳を傾けなければならないことです。「入園の時とくらべて ほんとにいい子になりました」というようなことがよくいわれますが、なにがどのようになったかが問題ですし、別に幼稚園や保育所に来ないでも、いい子にはなりうる点もあるし、こうしたからこうなったのだということを確信をもっていえるような保育こそが、保育の専門家・研究者そして科学者の口にすべきことだと思います。

パブロフは若い科学者に、

「徹底、徹底そして徹底であります。厳重に徹底ということになれてください。科学の高嶺にのぼろうとする前に、まずイロハから学ぶことです。手近な一歩をわがものとすることなしに、決してつぎへ進んではなりません。少なくも、自分の知識の不十分さを、きわめて大胆な推測や仮説によっておしかくそうとしてはなりません。このシャボン玉が移り変わる色どりで、どんなに諸君の眼をたのしませてくれたとしても、それは必ず破裂して、混乱いがいの何物をものこさないでありましょう。節制と忍耐になれてください。科学のなかでやりがいのある苦しい仕事をすることを学びなさい。事実を研究し、つみかさねなさい」

といっておりますが、幼児が楽しい絵を描いた、上手に歌を唱えるようになった、集団の一員としてお互いが自覚するようになった、それだけでも大変な努力のいることですが、なにかパブロフのいうようにシャボン玉の移り変わる色どりで楽しんでいるような気がします。私は今、ある保育所でアンデルセンの童話を子どもの保育の中にもち込んで、子どもたちにその醜いあひるの子の気持ちをなんとかわからせたいという実験保育を、目だたないがねばり強い研究者と保育者で一年がかりでやっているのに協力しながら感じたことは、教育愛とそれを実現する上での徹底した姿勢と節制、そして忍耐ということでした。その結果をいずれまとめ上げることに協力したいと思いますが、結果の整理はカスのようなもので、子どもたちはそれぞれ強烈な印象を生活の中で楽しんで学校へと巣立って行きました。親子二代、三代かかっても幼児教育の道はやめれないほど魅力的なものであり、またそのような先駆者がたくさんおることを知っておりますし、そのような人々の情熱に支えられて現代の幼児教育があることも知っておりますのでなおさらのこと、それをもっともっと前進させたいという願いをこめて、偉大な科学者の言葉などをひっぱりだしながら駄弁をろうしました。

（東京家政大学）